

## 融通性に富む性格にも一因

日本語の特徴の第一は、何と云っても“てにをは”にあります。これは中国語と比較してみれば、同じ文字を使っているだけによくわかります。例えば「送君還旧府」という文章は中国語では「ソウ・クン・カン・キュウフ」と読んでその意味を理解するのですが、日本語では「君が旧府に還るを送る」と読みます。

“が・に・を”という、全く意味(概念)を持たない言葉ですが、この言葉があるために、還るのが“君”であることがはっきりするのです。「送君還旧府」では、「君を送って旧府に還る」という意味にも取れるのです。

だから、これだけの文章では、旧府に還るのが“君”であるのかどうかは決められないのです。これが、中国の古典の読解しにくい最大の理由です。こういう点では、てにをはを持つ日本語は、読解に紛れが生じません。

英語やドイツ語やフランス語などの欧米諸語では、これを格変化という形で解決していますが、これと“てにをは”を比べてみますと、その効果は断然“てにをは”の方が優れています。

そのことは、「僕は君に本を贈る」を、「君に本を僕は贈る」とも、「本を君に僕は贈る」とも、「君に僕は本を贈る」とも、「本を僕は君に贈る」とも言えることでわかります。どのように順序を変えようと、その意味は全く紛れません。

しかし、“僕・君・本”のどれが最初に来るかで、同じ内容でも微妙な違いが生じ、話の重点がどこにあるかがわかります。この点、中国語や欧米諸語は言葉の順序が一定していますので、一定の表現しか出来ません。

こういうことが日本人の融通性に富む性格を作っているのではないかと思われれます。反対に、欧米人の几帳面さはその言葉の融通性のなさによるのではないかと思われれます。“てにをは”については、考えるべき問題がもっと多くありますが、問題が大きすぎてこれだけに止めておきます。

次の大きな特徴は、同じ意味(概念)の言葉がいくつもあって、相手の身分や親近の度合によってこれを使い分けている、ということです。

例えば、英語では“I”(アイ)にあたる言葉でも、相手が“君”と呼び合っている間柄の人に対しては“僕”を使いますが、“貴様”に対して

は“俺”、“あなた様”に対しては“わたくし”、“あなた”に対しては“わたし”“お前”に対しては“わし”を使います。

また、自分を“お父さん”と呼ぶわが子に対しては、自らをも“お父さん”と称し、自分を“伯父さん”と呼ぶ甥や姪に対しては、“伯父さん”と自称し、自分を“先生”と呼んでくれる教え子たちに対しては、自ら“先生”と称します。

このように、英語なら“I”としか言いようのない言葉が、日本語には実に豊富にあって、相手によってこれを使い分けているのです。また、すでにその例を挙げましたが、英語の“You”にあたる言葉も、同じように豊富にあります。

### 相手に応じた使い分けに特徴

これらの言葉を、相手に応じて使い分けることにより、自分が相手に対して、どのような敬意を、もしくは親愛の情を、抱いているかを相手に伝え、両方の関係を円滑にさせているのです。

このことは、動作を表わす“居る”“行く”“見る”“食べる”というような言葉にも及んでいます。“居(い)る”は、自分及び目下の者の場合に

は“居(お)る”と言い、目上の者に対しては“居(い)らっしゃる”と言います。

“行く”は、自分及び目下の者の場合には“参る”と言い、目上の者に対しては“いらっしゃる”と言い、“見る”は、“拝見する”に対して“ご覧になる”、“食べる”は、“頂(戴)く”に対して“召上がる”という言葉があります。

また、一般には、「上がらせて頂きます」「出席させて頂きます」というように、自分の行為は「.....させて頂く」と言い、目上には「お上がりになりますか」「ご出席になりますか」というように、「お(ご).....になる」というように言って区別します。

このように言葉を正しく使い分けるためには、勿論、言葉についての知識が必要ですが、それ以上に、相手の気持を尊重し、良い関係を保持するために、言葉を使い分けるのだという配慮が大切です。

こういう言葉の使い分けは、日本人の暖かい心遣いから生み出されたものですが、今は逆に、この言葉の使い分けが、日本人の暖かい心遣いを育てているのです。